シニア派遣としての立ち位置と配慮すること及び帰国後の役割

中山　真（新潟県・シニア）

１　はじめに

平成26年3月、37年間の新潟県及び新潟市公立学校教員の職を新潟市立内野中学校校長として定年退職し、辞した。その後、在外教育施設のシニア派遣制度に応募し、2度のシニア派遣を経験した。ホーチミン日本人学校に2年間、ミラノ日本人学校に3年間の派遣であった。

現役時代に在外教育施設での派遣経験がなかったために、両校とも一教諭として派遣された。派遣された日本人学校において、管理職経験者の自分がどのような立ち位置で一教員として学校教育に携わり、学校運営の一翼を担うのかは大きな課題であった。

また、日本国内と生活環境が大きく異なり、併せて医療機関の体制が異なる中で、健康の維持・増進が、特にシニア派遣の教員にとっての課題である。在外教育施設においては、日本国内のように、怪我・病気による休業に対する代替教員を就けることは容易ではない。結果として、子供達及び他の職員に多大な迷惑を及ぼすことになる。

以上、2点について課題意識をもって5年間勤務したことを振り返る。ここでは、後半のミラノ日本人学校での経験を中心に述べていきたい。

２　発表の概要

（１）学校の概要

イタリア北部の商業都市ミラノ市の西部に位置するミラノ日本人学校は昭和51年に設立された。各学年1学級の小中併せて9学級、児童生徒数約70名の小規模校である。YAMAHA、YKK、流通機関、金融機関等の現地支店や工場の管理職等として勤務する駐在員の子弟が多く学んでいる。そのため、年間30人前後の転出入が見られる。

また、現地イタリアであればこその特色ある教育が長い年月にわたって積み重ねられてきた。

例えば、7月前半、2泊3日の日程でアルプス登山を中心とした宿泊体験の実施である。マッターホルン（イタリア名チェルヴィーノ）を間近に仰ぎ、アルピニストとしてスイスへ一歩足を踏み入れる経験もした。1月半ばには、2泊3日の日程でアルプス山脈のモンテローザ（モンブランに次ぐヨーロッパ第2の峰）を屏風に見立ててのスキー体験が実施されている。何れも小学部5・6年生及び中学部の4～5学年にまたがる30人前後の児童生徒が活動する学校行事である。これら、二つの大きな行事の実施により、中学部の定期テストの日程及び成績処理、通知表の作成が大きな制約を受ける。

また、現地校との交流会を訪問及び受け入れということで二日間にわたって実施している。豊かで有意義な語学や文化の交流ができた。さらに、学習発表会と題して歌や劇などの芸能発表会を実施している。中学部では、「サウンドオブミュージック」や「美女と野獣」と題しての英語劇を披露した。

その他、小中合同大運動会、写生大会、イタリア人児童の野球チームとの野球大会、作品展、マラソン大会、餅つき大会、書写展など、多くの学校行事が実施され、盛り沢山である。

これまでの派遣されてきた職員の情熱と創意により新たな学校行事が次々に作られたが、2～3年勤務の派遣職員にとって行事を精選するという余裕がなかった為に、多くの学校行事に時には振り回されることにもなっているのが実情であった。これを精選し、児童生徒及び保護者に納得させるのに大きなエネルギーを費やした。

（２）校務主任としての立場

ミラノ日本人学校では、数年前から教頭が配置されなくなり、管理職は校長一人が担うことになってきた。そのため、校務主任という職種を独自に設け、これまで教頭が行ってきた管理職業務以外の業務をほぼ校務主任が担うこととなった。

2年間、この校務主任に任ぜられ職務を遂行してきた。とはいえ、中学部1年生の学級担任であり、週18時間の授業を担当するために、余裕がないのが実情である。

職務として、校長の相談に乗ること。領事館等の対外的なやりとりの窓口となって対応すること。文部科学省との事務的な業務の窓口となって対応すること。保護者会等の保護者対応の窓口となって対応すること。教務主任の作成する教育計画へのアドバイスを行うこと。派遣教員及び現地採用教員や事務職員の状況を把握し、適切なアドバイスを行うなど、職務内容は多岐にわたっている。

居住する住宅は、学校から徒歩10分程度の距離にあるため、朝6時50分に家を出て、7時に鍵を開け

る。校舎内を30分ほどの時間をかけて点検して児童生徒の登校及び職員の出勤を待つ。
8時20分から児童生徒の朝の活動が始まるため、学級担任として教室へ向かう。諸連絡も含めた20分間を生徒が主体となる活動を実施させる。その後、中学部は50分授業を水曜日を除いて毎日6校時まで週29時間の授業行う。業間は5分とタイトである。授業のない合間をみて、上記の校務主任としての職務を行う。

（３）周囲への目配りと気配り

管理職経験のあるシニア派遣である。ミラノ日本人学校がミラノの日本人社会においてどのような位置づけをもって運営されているのか、対外的にどのような対応をしなければならないのか、常に周囲に目を配って状況を把握して判断材料を蓄積することが重要である。
職員の言動や心理状況を適切に観察し、状況に応じた温かい声掛けやアドバイスをする。また、客観的な事実を校長へ報告し、校長が効果的に職員指導ができる状況を作ることも大切な役割である。

（４）現役教員を輝かすための距離感

現役派遣教員の一人一人が持ち味を生かして自信をもって職務を遂行できるよう、現役派遣教員の良さを見い出し、必要に応じてアドバイスできるようにすることがシニア派遣教員の役割である。そのために、様々な教育活動の企画・運営は若手の教員が前に出れるように、自らの位置や職員との距離感を一定に保っておくように努めた。現役派遣教員が困ったときに、いつでも適切なアドバイスができるようにしてきたつもりである。

（５）健康の維持・管理のため

シニア派遣教員は、年齢的に健康上のリスクが高い。その上、海外での生活そのものがストレスとなる。そのような中、自分の健康に責任をもって維持・管理することがシニア派遣教員に課せられた課題であると心得て毎日を送っていた。

①　食事

健康な身体づくりの元になるのが、栄養バランスを考慮した三度三度の食事である。自分一人での健康管理は難しい。配偶者の果たした役割は大きいものと感謝している。ともすると、海外での美味しい食べ物を前にして暴飲暴食をしがちであるが、間食も含めた食事のコントロール、管理を配偶者と共同で行った。おかげで、一年目の高かった血糖値が正常に戻った。

②　筋肉づくり

成長のピークをとうに過ぎたシニア派遣教員は、何もしないと身体が硬くなり、筋肉も衰える。そこで、赴任2年目より、校務主任という役割を利用して体力づくりをすることとした。朝の校舎の見回り時に、見回りを兼ねて体力づくりをすることにした。イタリアの建物は、防犯面での安全管理・室内の温度管理上、窓ガラスの外側にタッパレラと呼ぶ鎧戸がつけられている。校舎の見回りをする時に、閉ざされているタッパレラを開け、ガラス窓を開けて外の空気を入れる。この時に腰を意識してタッパレラ及びガラス窓を開ける。校庭の見回り時には、鉄棒を使って懸垂と柔軟体操をする。一度もできなかった懸垂が10回はできるようになった。これは、退勤時にも行い、一日2セットを日課とした。

③　脚力づくり

歩かないと脚力は衰える。特に膝周りの筋肉が衰えると膝の痛みから運動を控えたくなり、一層脚力が衰えることになる。そこで、意識して校舎内の見回りを多くするようにした。複数回校舎を見回り、教育環境の異常の有無の確認、教室内での児童生徒の様子を廊下から垣間見ることができた。
また、土曜日・日曜日の休日は交通機関を使わないでまち歩きや買い物をするようにした。目標は1万歩であり、1時間半歩くとその目標は達成できた。

３　成果と今後の課題

（１）シニア派遣教員は、派遣の経験を再び学校現場で生かすことができない。しかし、派遣の経験をまとめて、学校や地域社会に伝えることはできる。幸いにも、これまで複数回の講演の機会を得た。今後とも学校や地域社会に何らかの形で還元させたい。

（２）今、まちづくりセンターに勤務し、センター内の貸し部屋等の管理をしいる。窓口業務が中心なので、利用者に対して温かい誠意ある対応を心掛けている。利用者との対応で、シニア派遣の経験が生きていると思っている。そのような環境の中、地元のまちづくりに力を尽くしたい。